

仁科記念財団

案 内

2011年7月

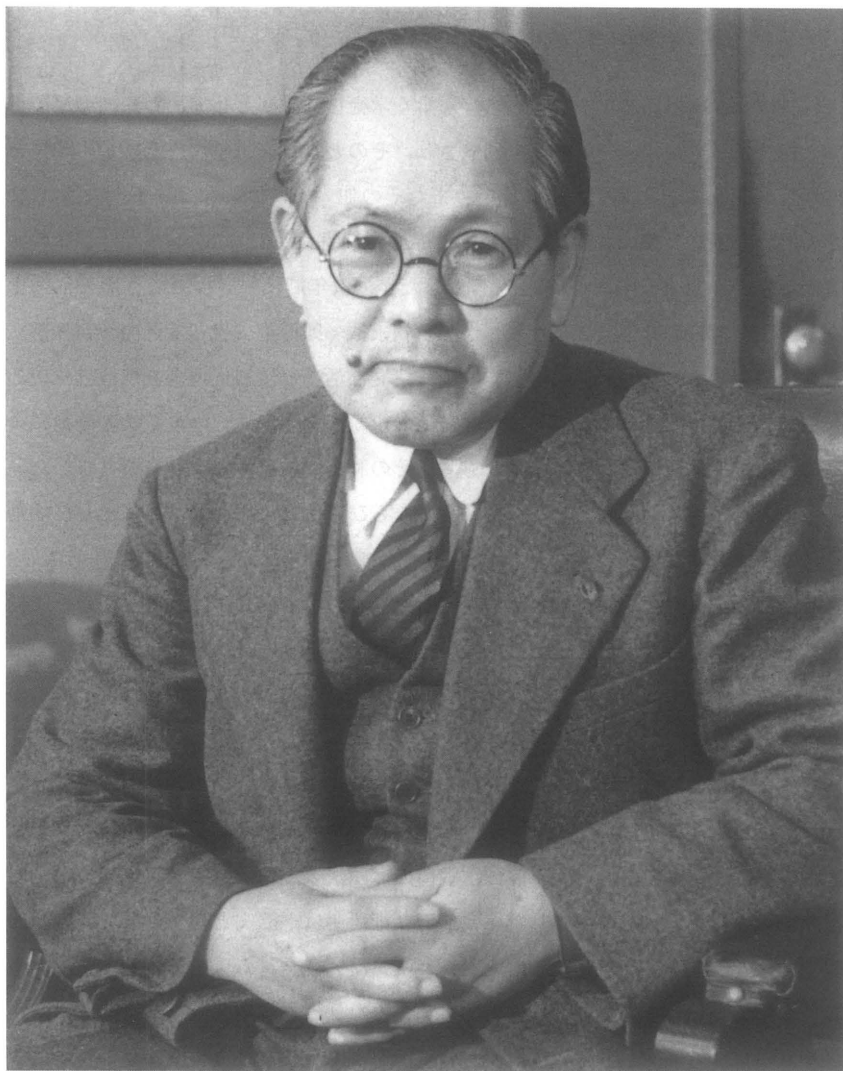


公益財団法人仁科記念財団

博士は岡山県に生まれ、東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後、理化学研究所に入り、1921年渡欧、1923年より1928年まで当時原子物理学の中心であったコペンハーゲンのボーア教授のもとで研究した。1928年クラインとともにディラックの相対論的量子力学に基づき、ガンマ線の電子による散乱に関する有名なクライン-仁科の式を導いた。帰朝後、量子力学、原子核物理学等、当時急速に展開した新しい原子物理学をわが国に育てることに力をつくした。湯川教授の中間子論、朝永教授の量子電気力学をはじめとするわが国の理論物理学、また原子核、宇宙線の実験的研究の発展は仁科博士の指導と励ましに負うところが多い。博士みずからは、戦前理化学研究所に当時世界最大と称せられたサイクロトロンを建設したが、戦後占領軍によって東京湾に沈められた。

戦後、理化学研究所長として、また株式会社科学研究所社長としてわが国の科学技術の再建に尽瘁したが、不幸にも途半ばにして病をもって逝去された。

博士は1946年文化勲章を受け、1948年日本学士院会員となられた。



仁科芳雄博士 (1890.12.6 - 1951.1.10)

仁科記念財団案内

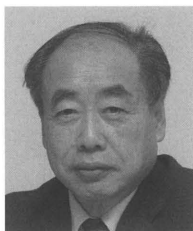
仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として、わが国の原子科学の祖、仁科芳雄博士を記念して創立され、そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会を欠かさず行い、またその他いくつかの事業を続けております。財団の設立当初の基金は、わが国財界からの寄付金2,165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円から成るものでしたが、数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。しかし、朝永振一郎博士（当初は財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と、初代理事長洪沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により、財団の永続が図られ、その後数次の募金によって、今日では6億円余りの基金をもち、その利子で活動するようになりました。そして最近、各界からいただく賛助会費ならびに個人の寄付金にも依拠して活動を続けています。

財団の存在の意義が広く認められ続けるためには、国内外の広い層からのご支持とご協力が必要であります。そして実際、今日まで活動を続けることができましたのは、古くからの財団関係者に限らず、多数のかたがたの温かいご支持とご協力のおかげであります。

そのようなご支持とご協力にこたえ、さらにその輪を広げることを念願して、われわれは1985年以来、この小冊子「仁科記念財団案内」を毎年発行しております。この小冊子の「案内」という名前は、戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にならってつけました。戦前の「理研」は、欧文と和文の研究報告の出版のほか、毎年、各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な小冊子を出しておりました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が、すこしでも多くのかたに、仁科記念財団に対して親しみをもっていただき、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

目 次

理事長あいさつ.....	小林 誠.....	2
§ 1. 仁科記念財団の事業概要.....		6
§ 2. 仁科記念賞.....		7
§ 3. 仁科記念講演会		12
§ 4. 財団出版物.....		18
§ 5. 財団ニュース.....		19
§ 6. 仁科記念室だより.....		21
仁科記念財団の設立とその後の経緯.....		23
公益財団法人仁科記念財団定款.....		24
役員及び評議員等名簿.....		40
付 録		
a. 仁科記念賞受賞者とその業績一覧		41
b. 賛助会員一覧		51



理事長あいさつ

2011年 4 月

仁科記念財団理事長 小林 誠

東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

このたび、山崎前理事長の後を継いで、仁科記念財団の理事長に就任いたしました。責任の重さに身の引きしめる思いでおりますが、皆様のお力添えをかりて、無事に任務を全うできるよう努力してまいりたいと思います。

財団は4月1日より、新しい公益法人制度のもとでの認定を受けた公益財団法人となりました。新しい定款には財団の目的を「故仁科芳雄博士のわが国及び世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学及びその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術及び国民生活の発展、ひいては世界文化の進歩に寄与すること」と謳っております。この目的を達成するために、従来から行っております仁科記念賞の授与、仁科記念講演会の開催、仁科記念室の運営、出版物の刊行などが中心的な事業として位置づけております。これらの事業の一層の充実を図ってまいりたいと考えております。

昨年（2010年）は仁科芳雄先生生誕120周年に当たりました。これを記念して、昨年の仁科記念講演会は「日本現代物理学の父 仁科芳雄博士の輝かしき業績」というテーマで仁科先生の業績を改めて振り返ることとしました。この講演会では、西村純先生に「ミューオンの発見」、池田長生先生に「ウラン237と対称核分裂の発見」についてそれぞれお話をいただきました。そして私も仁科先生のコペンハーゲンでの御研究を中心にお話しさせていただきました。講演の内容は、「仁科記念講演会の記録 No.52」でお読みいただけます。

仁科先生は1921年に渡欧され、1928年に帰国されましたが、その大半の期間、コペンハーゲンのニールス・ボーアのもとでご研究をされました。まさに量子力学成

立の時期に、その中心地で活躍されたのであります。当初はX線分光の実験的研究をされていましたが、ご帰国直前には、理論研究に転じて、有名なクライン・仁科の公式を発表されました。これは自由電子と光子の散乱断面積を与える公式を導いたものですが、ディラックの空孔理論の成立にも大きな影響を与えたことが推測されます。こうした歴史的な研究の進展を目の当たりにされた先生は、ご帰国後、大きな夢を抱いて理化学研究所の仁科研究室を主宰されたものと思われます。仁科記念財団は先生の理想を受け継ぎ、わが国の基礎科学の進展に貢献することを使命としていると考えます。

末筆になりましたが、新法人への移行に伴い、財団の運営体制の変更と、評議員・役員的大幅な交代がありました。退任されました評議員・役員の皆さまには長年の御尽力に対し深く感謝いたします。

2010年仁科記念財団案内「理事長あいさつ」

(山崎敏光前理事長) より

仁科記念財団は2005年に創立50周年を迎え、第2の半世紀へ歩み出しました。当財団が研究者や社会の皆様にとってさらに意義ある存在となるよう、皆様のお力添えをいただきながら努力してゆきたいと思います。よろしくお願いいたします。

一昨年は、3人の日本人物理学者のノーベル賞同時受賞という画期的な慶事がありました。その結果、息の長い基礎科学振興の大切さが社会に浸透するという、喜ばしい風潮が生まれてまいりました。南部陽一郎博士は、大阪市大に素粒子物理研究の拠点を築かれ、そこで多くの研究者を育まれました。米国に移られてからも仁科記念賞の授賞式・懇親会に屡々お見えになり、また1985年には仁科記念講演会で講演をされるなど、本財団を支えて来られた方でした。また、小林誠・益川敏英両博士は、1979年、今から30年も前、まだお名前もポピュラーでなかった頃に仁科記念賞を共同受賞しておられます。今回をもって、江崎玲於奈博士、小柴昌俊博士に続き、仁科記念賞受賞者からのノーベル物理学賞受賞者は4人となりました。どな

たも仁科記念賞が最初の受賞で、江崎先生は若いときにもらったこの賞が大きな励みになったと述べていらっしゃいます。本財団としてはこれに勝る喜びはありません。誇りをもって本財団の事業を進めてゆきたいと考えております。昨年はこれら受賞者をお招きしての仁科記念講演会が盛大に行われました。

長い間、本財団の常務理事をつとめられた中根良平先生が去る4月18日、岡山での仁科芳雄先生に関する講演会のあと、旅先で急逝されました。その直後放映されたNHKのテレビ番組「こころの遺伝子」の中には、いつものやさしい笑顔で登場され、仁科博士の業績を熱く語っておられました。慎んでご冥福をお祈りいたします。先生は仁科芳雄博士のもとで育った最後の研究者で、この数年間は、仁科博士の往復書簡や研究資料などの発見や広報のために情熱を注いでいらっしゃいました。残った私どもはできるだけ先生の活動を引き継ぎたいと思っております。

中根良平、仁科雄一郎、仁科浩二郎、矢崎裕二、江沢洋の5氏が心血を注いで発掘、編集された「仁科芳雄往復書簡集」全3巻は2006年に完結しました。みずす書房から出版されたこの貴重な書物は、仁科芳雄先生の旧オフィスに眠っていた往復書簡を中心にしたもので、1930年代から1940年代へかけての困難であり輝かしきもあつた現代物理学の開拓者たちの生の記録です。これまであまり知られていなかった科学の発展の一こま一こまが明らかにされました。1500ページに及ぶ書簡と、それに江沢さんが付け加えられた80ページにもなる解説に圧倒されます。最近でも、未公表の重要な資料がたくさん見つかって来ましたので、補巻の刊行を準備中です。

仁科記念財団の50周年記念事業の一環として、半世紀にわたる仁科記念講演会の講演記録をまとめて出版し、若い人々にも読んでもらえるようにしようとの目論みは、さいわい、シュプリングフェアラグ東京のご協力によって実現されました。2006年秋、まず「現代物理学の創造」と題する3巻の本になって出版され、引き続き、昨年には全体を1冊とする愛蔵版も出版されました。ちょうど、小林誠氏の講演録を追加したところでしたが、その直後、2008年ノーベル賞が発表されたわけです。結局この本には、湯川・朝永に続き、南部・小林というノーベル賞受賞者の講演が収録されています。これは日本語で書かれた講演録ですが、一昨年末、英語の

講演録がドイツのシュプリンガー本社から Lecture Notes in Physics シリーズの 1 冊として刊行されました。1967年のハイゼンベルク博士の講演に始まり2005年の Yang 博士の岡山講演までを含むこの講演録は、大変貴重なものとシュプリンガー社の編集ボードの方々から褒めていただきました。この本をコペンハーゲンのオーエ・ボーア先生に贈ったところ、早速次のようなメッセージをいただきました。

I am very grateful to the Nishina Memorial Foundation for sending me the collected volume of Nishina Memorial Lectures. It is very enlightening material and an impressive testimony of the perspectives in the activities of the Foundation. It is a fitting memorial to Nishina himself. Warm greetings, as ever. Aage

このようにして Nishina Memorial Foundation の名がさらに国際的に知られるようになるのではないかと願っております。

これから当財団がなすべきことの一つに国際化ということがあります。当財団は、仁科博士が国際的に著名な学者であったことを反映して、設立にあたりノーベル賞受賞者 5 名を含む44名の外国人著名学者からの寄付をいただくなど、当初から国際的でありました。その後の活動としても、43名にのぼる超一流の学者を仁科記念講演会に招待するなど、日本の研究者と海外の研究者をつなげるフォーラムの役目を果たしてきました。半世紀の間に国際化をなし遂げたわが国で、当財団に期待されていることは、嘗て「途上国」日本からの仁科博士がコペンハーゲンで第1線の研究者と共同研究を進め、それをもとに我が国での研究基盤を築いたことを思い起こせば、まだ発展途上にある国々からの優秀な研究者に勇気と機会を与えることではないでしょうか。もう一つは、仁科研究室の資料の調査・研究をさらに進め、その成果をひろく世の中に広め、利用していただくことがあると思います。

仁科記念財団設立の理念と伝統に照らして考えますと、当財団がやるべきことは多々あります。限られた財源の中ではありますが、有意義なことを実現できるように努力を傾けたいと思っております。

§ 1. 仁科記念財団の事業概要

ホームページ (<http://www.nishina-mf.or.jp>) もご覧ください。

1. 仁科記念賞の贈呈

広い意味の原子物理学とその応用に関し優れた研究業績をあげた比較的若い研究者に対して、賞状と賞牌及び賞金を贈呈しています。

2. 仁科記念講演会の開催

広い意味の原子物理学とその応用に関する学術の進展と、一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会及び同じ趣旨の地方講演会を開催しています。

3. 仁科記念奨励金の贈呈

- a. 海外の機関で研究活動を行う我が国の研究者に対し、渡航費、滞在費を含め研究活動に必要な経費を助成しています。
- b. 発展途上国の若手研究者を我が国の研究機関に招聘し、渡航費、滞在費を含め研究活動に必要な経費を助成しています。

4. 外国の優れた研究者の招聘

外国の指導的な研究者を招いて講演を依頼し、我が国の研究者との討論を通じて学術の国際交流を進めています。

5. 出版、広報及び調査

講演記録等を載せた「NKZ」及び広報誌「財団案内」の出版、仁科博士、朝永博士をめぐる科学史資料の収集、調査を行っています。

6. 仁科記念文庫の運営

仁科博士の蔵書及び寄贈によって追加された多量の図書を基幹とした文庫の運営を図るとともに、仁科記念室及び朝永記念室に保存されている貴重な資料の整理、編集を行い、研究者の利用に供するための作業を続けています。

§ 2. 仁科記念賞

「仁科記念賞は、原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は、功成り名遂げた大先輩に贈られるのではなく、むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」(“NKZ” 創刊号 (1962) 43ページより)

これまでの受賞者とその業績及び当時の所属を巻末に掲げます。

1955年度第1回仁科記念賞以来の受賞者の総数は162名となり、その中からは、ノーベル物理学賞受賞者4名(江崎玲於奈博士:1959年, 小林 誠博士, 益川敏英博士:1979年, 小柴昌俊博士:1987年), 文化勲章受章者・文化功労者17名, 日本学士院賞受賞者26名, をはじめ, 国内外で著名な賞に輝いた受賞者が多く, 物理学研究者社会において仁科記念賞の価値と名誉は広く認められています。

2010年度の仁科記念賞の受賞者と受賞業績を以下に紹介します。

2010年度 第56回 仁科記念賞 受賞者業績紹介

研究題目 大自由度カオスの理論

受賞者 金子邦彦

(東京大学大学院総合文化研究科・広域科学専攻教授
同研究科・複雑系生命システム研究センター長)



カオスの概念は古く中国の莊子「渾沌」にまで遡ることができる。このような思想的概念を議論する段階から, 20世紀初頭のポアンカレの研究により, 数学的研究対象としての「カオス」の概念へと発展していった。その後, 計算機の発展と共に, 具体的な系での数値実験により, さまざまなカオスが日本(力武常次や上田柳亮ら)

やアメリカ（ローレンツやメイラ）などで次々と発見された。それらに共通するカオスの特徴は、それらの時間発展に対する初期値依存性が極端に（指数関数的に）敏感なことである。すなわち、途中のわずかな計算誤差がやがて途方もなく大きな違いを産むことになり、一見現代の精密科学の研究対象になりくにくいように思われたが、研究が進むにつれて、それら複雑さの中に、フラクタルな規則性すなわち、相似則やスケーリング則などの普遍的な振る舞いが見出されカオス現象は多くの人々の注目を集めるようになった。しかも、それがきわめてまれな現象ではなく、ほとんどの系で見出される非常に普遍的な現象であることがわかってきた。しかし、これらの研究はすべて、少数自由度の系で行われてきた。

このような状況の下で、金子氏は、80年代初頭、世界に先駆けて大自由度カオスを生む機構と空間拡散の連続きとを分離した「結合写像格子」(Coupled Map Lattice (CML))というモデルクラスを新たに導入し、その相図解析から、空間分岐、時空間欠性、準定常的超過渡状態といった新現象を世界で初めて発見した。特に時空間欠性は、相転移の臨界現象との関係でも注目され、準定常的過渡状態は、乱流現象の理解に新しい視点を提起した。これらの現象はその後、液晶の電気対流、熱対流、粘性流体など様々な実験系で確認され、CMLは時空カオスの標準モデルとして、パターン形成から生態系研究まで広く応用されている。

その後、金子氏はさらに、統計力学における平均場モデルと同様の発想から、個々のカオス要素が平均場と相互作用するモデルクラス「大域結合写像」(Globally Coupled Map (GCM))を新たに導入した。その相図解析から、カオスと相互作用の強さに応じて、系が完全同期相、数個の引き込みクラスターに落ちる秩序相、部分引き込み相、非同期相への転移を起こすこと、そして階層的なクラスター化、秩序状態が生成崩壊を繰り返すカオスの遍歴現象、各要素のカオスと異なる、マクロな集団運動の出現といった。従来の統計物理学に収まらない、要素（ミクロ）と集団（マクロ）とが豊かな振る舞いを繰り成す動的現象を世界で初めて発見した。これらの現象はその後、ジョセフソン結合系の数値計算、レーザー系、電気化学反応系等の実験で確認され、大自由度カオス系の基本的概念となり、GCMは大自由度カオス系の標準モデルとして確立されるに到るとともに近年盛んなネットワーク上の

ダイナミクスの研究の先駆となった。

以上のように、金子邦彦氏は時空カオス・大自由度カオスの理論研究を牽引し、現象論的普遍性クラスの構成論的研究という複雑系研究の方向性を切り拓き、さらにミクロとマクロの相補性、ゆらぎと応答の関係性を軸に生物システムの研究へと展開する、独自性と新発見に満ちた研究を一貫して行っており、この新分野の今後の発展が大いに期待される。

主要論文

- 1) K. Kaneko, “Period-doubling of Kink-antikink Patterns, Quasi-periodicity in Antiferro-like Structures and Spatial Intermittency in Coupled Map Lattices”, Prog. Theor. Phys. 72 (1984) 480–486
- 2) K. Kaneko, “Spatiotemporal Intermittency in Coupled Map Lattices”, Prog. Theor. Phys. 74 (1985) 1033–1044
- 3) K. Kaneko, “Lyapunov Analysis and Information Flow in Coupled Map Lattices”, Physica 23D (1986) 436–447
- 4) J.P. Crutchfield and K. Kaneko, “Are Attractors Relevant to Turbulence?”, Phys. Rev. Lett. 60 (1988) 2715–2718
- 5) K. Kaneko, “Pattern Dynamics in Spatiotemporal Chaos”, Physica 34D (1989) 1–41
- 6) K. Kaneko, “Clustering, Coding, Switching, Hierarchical Ordering, and Control in Network of Chaotic Elements”, Physica 41D (1990) 137–172

研究題目 スピン三重項超伝導体ルテニウム酸化物の発見

受賞者 前野悦輝

(京都大学大学院理学研究科物理学・

宇宙物理学専攻 教授)



超伝導 (Superconductivity) は、1911年カマリンハ・オネスによって水銀で発見されたが、それ以後、現在に至るまで2000以上に及ぶ新しい超伝導体が発見されている。中でも1987年に発見された銅酸化物超伝導体は、その後大きく発展し、その臨界温度は $\sim 160\text{K}$ にまで上昇するに至っている。超伝導は、電気抵抗 = 0 や磁場を排除するマイスナー効果等大変興味深い性質を示すが、その原因は電子のペア (電子対) の形成であることが解明されている。ほとんどの超伝導体においては、このペアの組み方はスピン一重項 (シングレット) であると理解されてきた。一方、スピン三重項 (トリプレット) 超伝導の可能性が理論的に論じられてきたものの、それに関する実験的研究は限られていた。

前野氏は、1994年、銅酸化物と同じ二次元構造を持つ層状ルテニウム酸化物 Sr_2RuO_4 (その結晶構造を図1に示す) が超伝導を示すことを発見した [文献1]。前

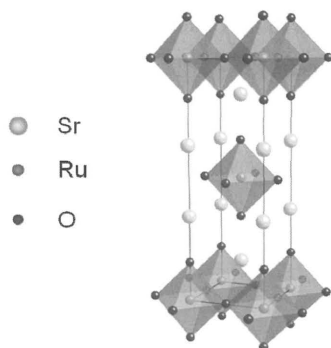


図1 Sr_2RuO_4 の結晶構造

野氏は、この物質の研究を進める中で、従来の超伝導にはみられない強い不純物依存性という特徴的な性質を明らかにし、この物質がスピン三重項超伝導の可能性があると指摘した。

一方、前野氏は独自の手法で、純良な単結晶の育成に成功し、それを用いて低温比熱の測定から超伝導ギャップの構造を明らかにし、さらに、超伝導転移温度の同位体効果、上部臨界磁場の抑制効果等を明らかにした。

前野氏は、この超伝導のスピン対の微視的構

造を明らかにするために、共同研究者とともに多くの実験を行い、この系がスピン三重項超伝導であることを直接的に示す多くの結果を得た。例えば、時間反転対称性の破れをミュオンスピン緩和法ならびに磁気光学カー効果で、さらに対の奇パリティ性ならびに時間反転対称性の破れを超伝導接合素子等を用いて示した。これらはいずれもこの系がスピン三重項超伝導であるという大変興味深い性質を示すことを支持している。さらに前野氏はこれらの研究を発展させ、混晶系 $(\text{Sr}, \text{Ca})_2\text{RuO}_4$ の電子相図を研究して、 Sr_2RuO_4 がモット絶縁体に近い強相関物質であることを実証し、モット絶縁体がバンド幅制御による金属化によって超伝導を発現するという新しいルートを実現した。

以上、前野氏は、 Sr_2RuO_4 において三重項超伝導という新しいタイプの超伝導を発見して、その現象と物質の両面から解明に尽力し、著しい成果を積み重ねることによって、超伝導の研究の舞台に新しい局面を開いた。

主要論文

- 1) Y. Maeno, H. Hashimoto, K. Yoshida, S. Nishizaki, T. Fujita, J. G. Bednorz and F. Lichtenberg, "Superconductivity in a Layered Perovskite without Copper" Nature 372, (1994) 532–534.

§ 3. 仁科記念講演会

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日の折とか例えば朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時行ってまいりました。定例の仁科記念講演会は、今回で56回を数え、伝統を誇りうるものとなりました。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。それは一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからであります。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。朝永博士及びそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の出版物“NKZ”に掲載されてきています。

2010年度は、仁科芳雄博士生誕120周年にあたることを記念して、仁科記念講演会を次のように開催しました。

仁科記念国際講演会

本年度5月に第1回国際加速器会議（IPAC'10）が京都で開催されるにあたり、会議の前日に国内外の著名な加速器科学者を招聘して、仁科博士以来の日本の加速器科学の発展と今後の展望について、以下の国際講演会が開催されました。

「“IPAC'10 Special Lectures to Commemorate the 120th Anniversary of the Birth of Yoshio Nishina : Dr. Nishina and advancement of particle accelerators and their applications in Japan”」

日時 2010年5月23日(日) 10:00~16:00

場所 国立京都国際会館

主催 理化学研究所仁科加速器研究センター

IPAC10組織委員会

講演 ①「Greetings」

山崎敏光(仁科記念財団理事長)

②「Foreword-Dr. Yoshio Nishina」

上坪宏道(理化学研究所特任顧問)

③「Cyclotrons and FFAGs: From Nishina's Pioneering Work to
RI-Beam Factory」

Michael Craddock (TRIUMF)

④「From TRISTAN to B-FACTORY」

木村嘉孝(高エネルギー加速器研究機構名誉教授)

⑤「Developments of SR in Japan」

石川哲也(理化学研究所播磨研究所長)

⑥「From KEK-PS to J-PARC」

山崎良成(J-PARC)

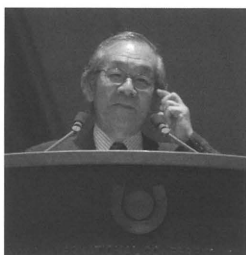
⑦「Accelerator Developments for Cancer Therapy」

山田聡(群馬大学教授)

⑧「Status of ILC and the Role of Japan in developing the ILC」

Marc Ross (FNAL)

成果報告書と英文講演録を財団ホームページに公開しています。



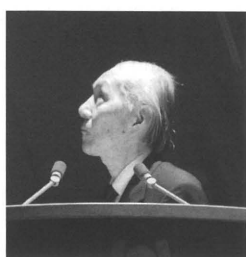
山崎 敏光 理事長



上坪 宏道 博士



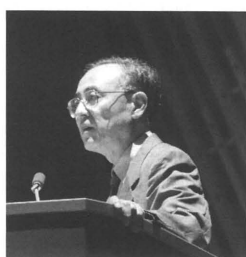
Michael Craddock 博士



木村 嘉孝 博士



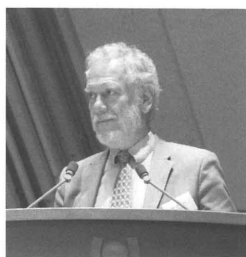
石川 哲也 博士



山崎 良成 博士



山田 聡 博士



Marc Ross 博士

IPAC'10

IPAC'10 Special Lectures to Commemorate the
120th Anniversary of Birth of Yoshio Nishina

Dr. Nishina and advancement of particle accelerators and their applications in Japan

120

Date

May 23 (Sun), 2010

Time

10:00 – 16:00

Venue

Main Hall, Kyoto International Conference Center

<http://www.icckyo.or.jp/en/index.html>

phone:075-705-1234

Program

"Greetings by the president of Nishina Memorial Foundation"

Toshimitsu Yamazaki

"Forward - Dr. Yoshio Nishina"

Hiromichi Kamitsubo (RIKEN)

"Cyclotrons and FFAGS: From Nishina's Pioneering Work to RI-Beam Factory"

Michael Crraddock (TRIUMF)

"From TRISTAN to B-FACTORY"

Yoshitaka Kimura (KEK)

"Developments of SOR in Japan"

Kazutake Koura (KEK)

"From KEK-PS to J-PARC"

Yoshishige Yamazaki (KEK)

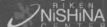
"Accelerator Developments for Cancer Therapy"

Satoru Yamada (Gunma Univ.)

"Status of ILC and the Role of Japan in Developing the ILC"

Marc Ross (FNAL)

Hosted by



RIKEN Nishina Center for Accelerator-Based Science

IPAC'10 Organizing committee

Sponsored by

Nishina Memorial Foundation

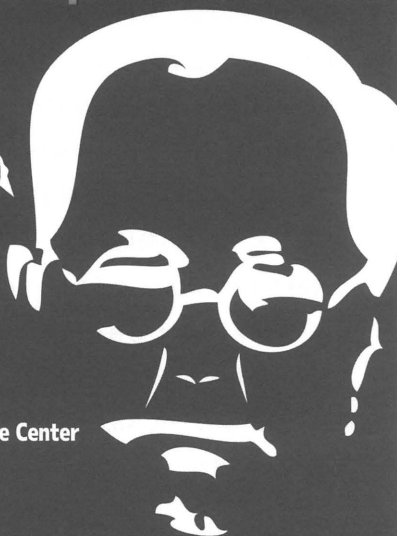
Contact

Osamu Kamigaito

RIKEN Nishina Center

E-mail: nishina120@ribf.riken.jp

URL: <http://www.nishina.riken.go.jp/Eng/information/nishina120.html>



第56回定例仁科記念講演会

仁科芳雄博士生誕120周年記念講演会

「日本現代物理学の父 仁科芳雄博士の輝かしき業績」

日時 2010年12月6日（月）16：00～17：30

場所 東京大学理学部1号館 小柴ホール

主催 東京大学理学部物理学教室及び同化学教室

理化学研究所仁科加速器研究センター

講演 ①「コペンハーゲンから理研へー素粒子物理学のあけぼの」

小林誠（日本学術振興会理事，高エネルギー加速器研究機構特別荣誉教授）

②「ミューオンの発見」

西村純（東京大学名誉教授，宇宙科学研究所名誉教授）

③「ウラン-237と対称核分裂の発見」

池田長生（筑波大学名誉教授，元日本アイソトープ協会常務理事）

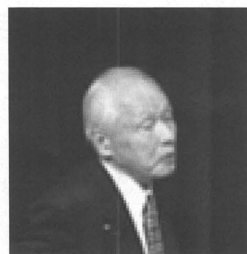
講演録がNKZ シリーズ No. 52として刊行されています。また，財団ホームページにも公開しています。



小林 誠 博士



西村 純 博士



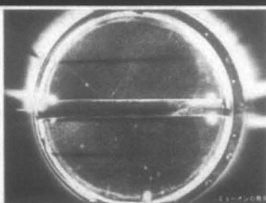
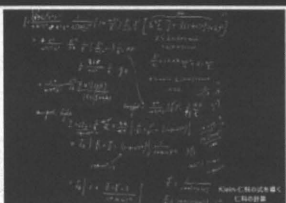
池田 長生 博士

日本現代物理学の父 仁科芳雄博士生誕 120 周年記念講演会

仁科芳雄博士の輝かしき業績

日時 2010 年 12 月 6 日 16:00-17:30 [15:30 開場]

場所 東京大学理学部 1 号館 小柴ホール



プログラム

1. コペンハーゲンから理研へ — 素粒子物理学のあけぼの

小林 誠 | 日本学術振興会理事・高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授

2. ミューオンの発見

西村 純 | 東京大学名誉教授・宇宙科学研究所名誉教授

3. ウラン -237 と対称核分裂の発見

池田 長生 | 筑波大学名誉教授・元日本アイソトープ協会常務理事

共催 東京大学理学部物理学教室、同 化学教室、理化学研究所仁科加速器研究センター

後援 仁科記念財団

http://www.phys.s.u-tokyo.ac.jp/20101206_nishina/index.html にてインターネット配信

§ 4. 財団出版物

2010年度には、次の出版物を刊行しました。

「仁科記念財団案内（2010年7月）」

NKZ-50「自然法則の対称性とその破れ」(2010年6月)

南部陽一郎（シカゴ大学名誉教授）

NKZ-51「70年の素粒子，混沌からパラダイムへ」(2010年11月)

益川敏英（名古屋大学素粒子宇宙起源機構長，京都産業大学益川塾教授
・塾頭，京都大学名誉教授）

NKZ-52「日本現代物理学の父仁科芳雄博士の輝かしき業績」(2011年2月)

小林 誠（日本学術振興会理事，高エネルギー加速器研究機構特別栄誉
教授）

西村 純（東京大学名誉教授，宇宙科学研究所名誉教授）

池田長生（筑波大学名誉教授，元日本アイソトープ協会常務理事）

§5. 財団ニュース

(1) 2010年度仁科記念賞贈呈式

2010年12月6日、仁科芳雄博士の誕生日に2010年度仁科記念賞の贈呈式を行い、続いて受賞者を囲み懇親会を開催しました。懇親会には、財団関係者とこれまでの受賞者が多数参加し、研究交流が行われました。



(2) 公益財団法人仁科記念財団の設立

仁科記念財団は、1955年設立以来、財団法人として原子物理学の振興のための研究助成を行ってきましたが、これを公益事業として主体的に行うため、以下の平成23年4月18日付「認定の公示」にあります通り、平成23年4月1日より公益財団法人仁科記念財団として新たに出発することとなりました。それに伴い、新たな「定款」を定めるとともに、評議員、役員、監事等を一新いたしました。

平成23年 4 月18日

内閣府大臣官房公益法人行政担当室

認定の公示

一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成18年法律第50号）第44条の認定を受け、平成23年 4 月 1 日付けで主たる事務所の所在地において解散の登記及び設立の登記をした旨、別紙記載の法人より同法第108条第 2 項の規定による届出があったので、同法第108条第 1 項の規定に基づき公示する。

別紙

1. 法人コード：A006833
2. 法人の名称：財団法人仁科記念財団
3. 認定を受けた後の法人の名称：公益財団法人仁科記念財団
4. 代表者の氏名：小林 誠
5. 主たる事務所の所在場所
東京都文京区本駒込二丁目28番45号
6. 公益目的事業
(1) 原子物理学の振興
7. 収益事業等
該当なし
8. 旧主務官庁の名称：文部科学省

§ 6. 仁科記念室だより

(1) 資料の提供

- ・ 資料名：大サイクロトロン設計図面等一式

展覧会名：「真空から生まれる科学と技術－アリストテレスからカミオカンデまで」

(2010年10月16日～12月5日)

主催者・会場：東京大学駒場博物館

- ・ 資料名：仁科芳雄博士の写真

提供先：名古屋テレビ

番組名：テレビドキュメントヒバクコク～切り捨てられた残留放射線～

(2010年11月29日)

(2) 見学者

- ・ 見学会名：「仁科芳雄博士の足跡を訪ねて」

見学施設：仁科記念室，サイクロトロンモニュメント

説明者；矢野安重常務理事

見学者：岡山県里庄町中学生（9名），他

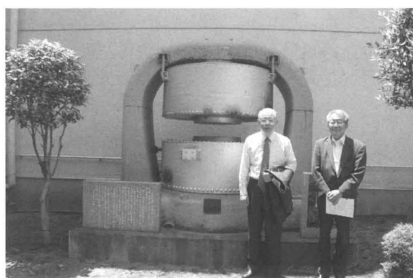
目的：仁科博士の出身地の選抜された中学生を対象にした「仁科博士の足跡をたどる国内・海外研修の旅」の一環

主催者：里庄中学校，科学振興仁科財団，里庄町

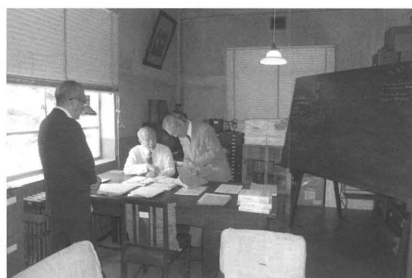
- ・ 見学者：藤家洋一元原子力委員会委員長ご一行

説明者；山崎敏光理事長，矢野安重常務理事

- ・ 個人の見学；野依良治理化学研究所理事長，岸輝雄物質・材料研究機構顧問ほか多数



戦後再建された小サイクロトロン（理研
第3号サイクロトロン）の前にて
野依理化学研究所理事長 矢野常務理
事



仁科博士の机に座って山崎前理事長から
仁科博士と湯川博士の書簡等保管されて
いる史料の説明を受ける野依理研理事長
（仁科記念室にて）

仁科記念財団の設立とその後の経緯

1951年仁科芳雄博士の没後、博士の偉大な業績を称えとともに、原子物理学の基礎とその応用の分野において優れた研究者を育成するという博士の遺志をつぐ事業を行うため、当時の吉田茂首相を会長として設立発起人会が結成され、1955年11月5日に財団法人仁科記念財団が設立されました。（「財団設立趣意書並ニ寄附行為」をホームページでご覧いただけます。）

この設立に当たっては、わが国の財界からの寄付2,165万円、国内の個人の寄付234万円、海外の学者からの寄付約100万円、計約2,500万円をその基金としました。

1960年には第2次募金、さらに1969年から1976年にわたって第3次募金、1980年から第4次募金を行い、現在約5億8600万円の基本財産に達しました。2001年には元仁科研究室研究員故中山弘美博士のご遺族からのご寄付を基に研究助成を目的とする仁科記念奨励基金を創設し、寄付金を加えて現在（2011年）その額は約2,900万円となっています。これらの運用益、賛助会員会費、および寄付金に基づいて財団の活動を営んでおります。

財団の創立に当たっては、初代理事長洪沢敬三氏が財団の基礎の確立に尽力され、洪沢氏の逝去後は朝永振一郎博士が理事長（在任：1963年～1979年）に就任し、1979年7月逝去の日まで財団の発展のために心を砕かれました。その後理事長は久保亮五博士（1979年～1995年）、西島和彦博士（1995年～2005年）と引き継がれ、2005年9月から2011年3月までは山崎敏光博士が理事長を務めました。

財団は創立以来、原子物理学の振興という公益事業を助成してまいりましたが、2008年12月に施行された公益法人改革法に沿って、この公益事業を主体的に推進する公益財団法人へ移行することとし、2011年4月、公益財団法人仁科記念財団として生まれ変わりました。新法人の初代理事長には小林誠博士が就任いたしました。

理事長をはじめ関係者一同、仁科博士を記念するにふさわしい財団として、その一層の発展を念願し、財団の運営に努力してまいります。

公益財団法人仁科記念財団定款

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、公益財団法人仁科記念財団という。

(事務所)

第2条 この法人は、主たる事務所を東京都文京区におく。

第2章 目的および事業

(目的)

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国及び世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学及びその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術及び国民生活の発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、本邦および海外において、次の事業を行う。

- (1) 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収めた者に対する仁科記念賞など褒賞の授与
- (2) 原子物理学およびその応用に関する内外著名研究者による仁科記念講演会など学術的交流・集会の開催
- (3) 原子物理学およびその応用に関する歴史的資料・図書などの発掘・研究・保存・公開のための仁科記念室の運営
- (4) 原子物理学およびその応用に関する知識および思想の普及啓発のための出版

物刊行などの活動

- (5) 原子物理学およびその応用に関する研究において、優秀な人材の海外への派遣および外国からの受け入れの助成
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

(事業年度)

第5条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第3章 財産および会計

(財産の構成)

第6条 この法人の財産は、次に掲げるものをもって構成する。

- (1) 設立日の財産目録に記載された財産
- (2) 設立日後の寄附金品
- (3) 財産運用収入
- (4) 賛助会費
- (5) その他の収入

(財産の種別)

第7条 この法人の財産は、基本財産、特定資産および運用財産の3種類とする。

2 基本財産は、次に掲げるものをもって構成する。

- (1) 設立日の財産目録中、基本財産として記載された財産
- (2) 基本財産とすることを指定して寄附された財産
- (3) 理事会において運用財産または特定資産から基本財産に繰り入れることを決議した財産

3 基本財産以外で、寄附者の指定または理事会の決議により用途を特定の目的に制約した財産は、特定資産として管理する。

4 運用財産は、基本財産および特定資産以外の財産とする。

(財産の管理・運用)

第8条 この法人の財産の管理・運用は、理事長が行うものとし、その方法は理事会で別に定める。

2 財産は、安全確実かつ相応の運用収入が得られる方法で運用しなければならない。

3 この法人の事業遂行に要する費用は、運用財産をもって支弁する。

(基本財産の処分の制限)

第9条 基本財産は、これを処分し、また担保に供してはならない。ただし、この法人の事業遂行上やむを得ない事由があるときは、理事会において議決に加わることのできる理事の3分の2以上の決議を経て、その一部に限り処分し、または担保に供することができる。

(特定資産の処分)

第10条 特定資産への繰り入れおよび特定資産の取り崩しは、理事会の決議を経て行う。

(事業計画および収支予算)

第11条 この法人の事業計画書およびこれに伴う収支予算書等は、毎事業年度の開始前に理事長が作成し、理事会でこれを決議する。事業年度開始後これを変更する場合も同様とする。

2 前項の事業計画書および収支予算書等については、毎事業年度開始の日の前日までに行政庁に提出しなければならない。

(事業報告および決算)

第12条 この法人の事業報告および決算については、毎事業年度終了後、理事長が事業報告書および計算書類ならびにこれらの附属明細書、財産目録（以下「財産

目録等」という)を作成し、会計監査人の会計監査および監事の監査を受け、理事会の承認を経たうえで、定時評議会において承認を得るものとする。

2 前項の財産目録等については、毎事業年度の終了後3ヶ月以内に行政庁に提出しなければならない。

3 この法人は、第1項の定時評議員会の終結後直ちに、法令の定めるところにより貸借対照表を公告するものとする。

(長期の借入金および重要な財産の処分または譲受け)

第13条 この法人が資金の借入をしようとするときは、その事業年度の収入をもって償還する短期借入金を除き、評議会において、総評議員の3分の2以上の議決を経なければならない。

2 この法人が重要な財産の処分または譲受けを行おうとするときも、前項と同じ議決を経なければならない。

(会計原則)

第14条 この法人の会計は、一般に公正妥当と認められる公益法人の会計の慣行に従うものとする。

第4章 評議員および評議員会

第1節 評 議 員

(定数)

第15条 この法人に、評議員7名以上15名以内をおく。

2 評議員のうち、1名を評議員会会長とする。

(選任等)

第16条 この法人の評議員の選任は、評議員会の決議により行う。

2 この法人の評議員の構成は、理事および監事の構成について規定した公益社団

法人及び公益財団法人の認定等に関する法律（以下「認定法」という）第5条第10号および第11号に準じたものとする。

- 3 評議員会会長は、評議員会において選定する。
- 4 評議員は、この法人の理事または監事を兼ねることができない。
- 5 評議員に異動があったときは、2週間以内に登記し、登記事項証明書等を添え、遅滞無くその旨を行政庁に届け出るものとする。

（権限）

第17条 評議員は、評議員会を構成し、第24条に規定する事項の決議に参画するほか、法令の定めるその他の権限を行使する。

（任期）

第18条 評議員の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。ただし、再任を妨げない。

- 2 任期満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。
- 3 評議員は、辞任または任期満了においても、第15条第1項に定める定数に足りなくなるときは、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

（解任）

第19条 評議員が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の議決に加わることでできる評議員の3分の2以上の決議によって解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないとき

（報酬等）

第20条 評議員は無報酬とする。

- 2 評議員には、評議員会の決議により別に定める規定に従い、その職務を行うために要する費用を支給することができる。

第2節 評 議 員 会

(構成)

第21条 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

- 2 評議員会会長は、評議員会の議長をつとめる。

(開催)

第22条 評議員会は、定時評議員会として毎事業年度の終了後3ヶ月以内に開催するほか、必要に応じて随時開催することができる。

- 2 評議員会は、評議員の過半数の出席で成立する。

(招集)

第23条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき代表理事が招集する。

(権限)

第24条 評議員会は、次の事項を決議する。

- (1) 評議員の選任および解任
- (2) 役員の選任および解任
- (3) 役員の報酬ならびに費用の額の決定
- (4) 定款の変更
- (5) 毎事業年度の事業報告および決算の承認
- (6) 長期借入金ならびに重要な財産の処分および譲受け
- (7) 公益目的取得財産残額の贈与および残余財産の処分
- (8) 合併、事業の全部もしくは一部の譲渡または公益目的事業の全部の廃止
- (9) その他法令またはこの定款に定める事項

(決議)

第25条 評議員会の決議は、法令およびこの定款に特に規定するものを除き、議決に加わることのできる評議員の過半数が出席し、出席した評議員の過半数をもって行う。

- 2 評議員および役員を選任する議案を決議するに際しては、候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。
- 3 理事が、評議員会の目的である事項について提案をした場合において、当該提案につき、評議員の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、当該提案を可決する旨の評議員会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第26条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成し、議長および会議に出席した評議員のうちから選出された議事録署名人2名がこれに署名捺印しなければならない。

第5章 役員および理事会

第1節 役員等

(役員の種類および定数)

第27条 この法人に、次の役員をおく。

- (1) 理事 7名以上15名以内
- (2) 監事 1名以上3名以内
- 2 理事のうち1名を代表理事とし、理事長と呼称する。
- 3 代表理事以外の理事のうち、若干名を業務執行理事とし、常務理事と呼称する。

(理事の職務)

第28条 理事は、理事会を構成し、この定款の定めるところにより、この法人の業

務の執行を決定する。

- 2 理事長は、この法人の業務を総理し、この法人を代表する。
- 3 常務理事は、理事長を補佐し、この法人の業務を執行するほか、理事長に事故があるときまたは理事長が欠けたときは、評議員会および理事会招集ならびに理事会議長の職務を代行する。
- 4 理事長、常務理事は、毎事業年度に4ヶ月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務)

第29条 監事は、次に掲げる職務を行う。

- (1) 理事の職務執行状況を監査すること
- (2) 各事業年度の事業報告および決算を監査し、監査報告を作成すること
- (3) 評議員会および理事会に出席し、必要あるときは意見を述べること
- (4) 財産、会計および業務の執行についての不正の事実を発見したときは、これを評議員会および理事会に報告すること
- (5) その他、監事に認められた法令上の権限を行使すること

(選任等)

第30条 理事および監事は、評議員会の決議によって選任する。

- 2 理事および監事の構成は、認定法第5条第10号及び第11号に定める基準によるものとする。
- 3 理事、監事および評議員は、相互にこれを兼ねることができない。
- 4 理事および監事に異動があったときは、2週間以内に登記し、登記事項証明書等を添え、遅滞無くその旨を行政庁に届け出るものとする。

(任期)

第31条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。

- 2 監事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任は妨げない。
- 3 任期満了前に退任した理事または監事の補欠として選任された理事または監事の任期は、退任した理事または監事の任期の満了する時までとする。
- 4 任期の満了または辞任により退任した理事長は、新たに選任された理事長が就任するまで、なお理事長としての権利義務を有する。
- 5 理事および監事は、辞任または任期満了においても、第27条第1項に定める定数に足りなくなるときは、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

(解任)

第32条 理事または監事が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないとき

(報酬等)

第33条 理事または監事は無報酬とする。ただし、常勤の理事および特別な職務を執行した理事または監事にはその対価として、評議員会において別に定める規程に従い、報酬を支給することができる。

- 2 理事または監事には、評議員会の決議により別に定める規定に従い、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。

(顧問)

第34条 この法人に、顧問を若干名おくことができる。

- 2 顧問は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。
- 3 顧問の任期は、2年とする。
- 4 顧問は、理事長の諮問に応え、理事長に対して、意見を述べることができる。

- 5 顧問は、無報酬とする。ただし、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。

第2節 理 事 会

(構成)

第35条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(職務)

第36条 理事会は、法令およびこの定款に定めるところにより、この法人の業務執行の決定および理事の職務執行の監督等を行うほか、理事長および常務理事の選任および解任を行う。

(開催)

第37条 理事会は、4ヶ月を超える間隔で2回以上開催する。

2 臨時理事会は、必要に応じて随時開催することができる。

3 理事会は、理事の過半数の出席で成立する。

(招集)

第38条 理事会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事長が招集する。

2 理事会の議長は、理事長がこれにあたる。

(決議)

第39条 理事会の決議は、理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

2 理事が理事会の決議の目的である事項について提案をした場合において、当該提案につき理事の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたとき（監事が当該提案について異議を述べたときを除く）は、当該提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第40条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成し、議長および出席した監事が署名捺印しなければならない。

第6章 会計監査人

(職務)

第41条 この法人に会計監査人をおく。会計監査人は、法令の定めるところにより、第12条第1項の財産目録等の監査を行い、会計監査報告を作成する。

(選任)

第42条 会計監査人は、評議員会において、監査法人または公認会計士の中から、選任する。

(任期)

第43条 会計監査人の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度に関する定時評議員会の終結の時までとする。ただし、再任を妨げない。

(解任)

第44条 会計監査人が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき
- (2) 会計監査人としてふさわしくない非行があったとき
- (3) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、またはこれに堪えないとき

(報酬等)

第45条 会計監査人の報酬等の金額は、監事の同意を得て、理事長がこれを定める。

(責任限定契約)

第46条 この法人は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第198条において準用する同第111条第1項の会計監査人にかかる責任について、当該会計監査人が職務を行うにつき善意でかつ重大なる過失がないときは同第113条第1項の規定による最低責任限度額を限度とする旨の契約を、あらかじめ会計監査人と締結することができる。

第7章 委員会

(委員会)

第47条 この法人に有識者からなる選考委員会、運営諮問委員会および助言委員会をおく。

2 各委員会は、この法人のため次の職務を行う。

(1) 選考委員会は、仁科記念賞等の選考を行う。

(2) 運営諮問委員会は、この法人の事業の立案と選定を行う。

(3) 助言委員会は、この法人の事業に対する助言を行う。

3 各委員会の委員の選任は、理事会において行う。

4 各委員会の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

5 各委員会の委員には、理事会において別に定める規程に従い、その職務を行うために要する費用および謝金の支払いをすることができる。

6 各委員会の構成および運営等に関し必要な事項は、理事会において別に定める委員会規程による。

7 理事会は、この法人の運営に資するため、この他の委員会をおくことができる。

第8章 事務局

(設置等)

第48条 この法人の事務を処理するため、事務局を設置する。

- 2 事務局には、事務局長ほか所要の職員をおく。
- 3 職員は、理事長が任免する。ただし、事務局長は、理事長が理事会の承認を得て任免する。
- 4 事務局の運営に関し必要な事項は、理事会が別に定める。

(備付け帳簿および書類)

第49条 事務局には、常に次に掲げる帳簿および書類を備えておかなければならない。

- (1) 定款
- (2) 理事、監事および評議員の名簿
- (3) 認定等および登記に関する書類
- (4) 財産目録
- (5) 理事会および評議員会の議事に関する書類
- (6) 役員等の報酬規程
- (7) 事業計画書および収支予算書等
- (8) 事業報告書および計算書類等
- (9) 監査報告書
- (10) その他法令で定める帳簿および書類

第9章 賛 助 会 員

(賛助会員)

第50条 この法人に賛助会員をおく。賛助会員は、この法人の趣旨に賛同する団体、法人または個人であって、理事会において別に定める規程により賛助会費を納入するものとする。

第10章 定款の変更ならびに解散

(定款の変更)

第51条 この定款は、法令に別段の定めがある場合を除き、評議員会において、議決に加わることのできる評議員の3分の2以上の決議を経て変更することができる。

2 前項にかかわらず、評議員会において、議決に加わることのできる評議員の4分の3以上の決議を経て、第3条に規定する目的および第4条に規定する事業ならびに第16条、第19条に規定する評議員の選任および解任の方法について、変更することができる。

(解散)

第52条 この法人は、「一般社団・財団法人法」第202条に規定する事由およびその他法令で定めた事由により解散する。

(公益目的取得財産残額の贈与先)

第53条 この法人が公益認定の取り消しの処分を受けた場合または合併により法人が消滅する場合（その権利義務を承継する法人が公益法人であるときを除く）において、公益目的取得財産残額があるときは、評議員会の議決により、これに相当する額の財産を、当該公益認定の取り消しの日または当該合併の日から1ヶ月以内に、この法人と類似の事業を目的とする他の公益法人等認定法第5条第17項に掲げる者に贈与するものとする。

(残余財産の贈与先)

第54条 この法人が、解散等により清算するとき有する残余財産は、評議員会の議決により、この法人と類似の事業を目的とする他の公益法人等認定法第5条第17項に掲げる者であって租税特別措置法第40条第1項に規定する公益法人等に該当する者に贈与するものとする。

第11章 情報公開および個人情報の保護

(情報公開)

第55条 この法人は、公正で開かれた活動を推進するため、その活動状況、運営内容、財務資料等を積極的に公開するものとする。

(個人情報の保護)

第56条 この法人は、業務上知り得た個人情報の保護に万全を期すものとする。

(公告)

第57条 この法人の公告は、電子公告による。

- 2 事故その他やむ得ない事由によって前項の電子公告ができない場合は、官報に掲載する方法による。

第12章 補 則

(委任)

第58条 この定款に定めるもののほか、この法人に関し必要な事項は、理事会の決議により別に定める。

附 則

- 1 この定款は、この法人が行政庁の認定を受け公益財団法人への移行の登記をした日(「設立日」という)から施行する。
- 2 この法人が公益財団法人への移行の登記をしたときは、第5条の規定にかかわらず、当該設立日を事業年度の始まりとする。
- 3 この法人の、設立日に就任する評議員は、第16条第1項の規定にかかわらず、次の通りとする。

(評議員)

有本 建男	川路 紳治	郷 通子	佐藤 勝彦
鈴木 厚人	高橋真理子	伊達 宗行	中原 恒雄
廣田 榮治	宮沢 弘成	山崎 敏光	吉田庄一郎

- 4 この法人の、設立日に就任する代表理事（理事長）、業務執行理事（常務理事）、理事および監事は、第30条第1項の規定にかかわらず、次の通りとする。

(代表理事)

小林 誠

(業務執行理事)

鈴木増雄	矢野安重	山田作衛
------	------	------

(理事)

秋光 純	江澤 洋	田畑米穂	仁科雄一郎
西村 純	和達三樹		

(監事)

荒船 次郎	池田 長生
-------	-------

- 5 この法人の、設立日に就任する会計監査人は、第42条の規定にかかわらず、次の通りとする。

(会計監査人)

宮田芳直

役員及び評議員等名簿

(2011年6月1日現在, 五十音順)

理事長 小林 誠

常務理事 鈴木 増雄 矢野 安重 山田 作衛

理事 秋光 純 江澤 洋 田畑 米穂 仁科雄一郎 西村 純
和達 三樹

監 事 荒船 次郎 池田 長生 会計監査人 宮田 芳直

顧問 有馬 朗人 江崎玲於奈 小柴 昌俊 南部陽一郎 野依 良治
益川 敏英 若井 恒雄

評 議 員 有本 建男 川路 紳治 郷 通子 佐藤 勝彦 鈴木 厚人
 高橋真理子 伊達 宗行 中原 恒雄 廣田 榮治 宮沢 弘成
 山崎 敏光（会長） 吉田庄一郎

運営諮問 安藤 恒也 家 泰弘 江口 徹 梶田 隆章（委員長）

委員 永宮 正治 仁科浩二郎 早野 龍五 藤川 和男

選考委員 藤川 和男（委員長）他13名

助言委員 原 禮之助（委員長）（助言委員会の名簿はホームページに公開されている。）

付 録

仁科記念賞受賞者とその業績

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1955	大阪大学理学部 緒方 惟一	大型質量分析器の完成
	大阪市立大学 西島 和彦 理学部	素粒子相互変換
1956	大阪大学理学部 芳田 奎	反強磁性体における磁気異方性エネルギー
	東京大学農学部 三井 進午	同位元素による植物の栄養ならびに土壤肥料的 研究
	農業技術研究所 西垣 晋	
	〃 江川 友治	
1957	蚕糸試験場 潮田 常三	
	東京大学理学部 久保 亮五	非可逆過程の統計力学
1958	大阪大学理学部 杉本 健三	原子核の励起状態の磁気能率, および電気四極 子能率の測定
	東京教育大学 沢田 克郎 理学部	電子ガスの相關エネルギーに関する研究
1959	ソニー(株) 江崎玲於奈	エサキダイオードの発明, およびその機能の理 論的解明
	理化学研究所 中根 良平	化学交換反応による同位元素濃縮
1960	大阪府立大学 吉森 昭夫 理学部	磁性結晶におけるスピンのらせん状配列の理論
1961	東京大学 丹生 潔 原子核研究所	中間子多重発生の火の玉模型
	名古屋大学 福井 崇時 理学部	デイスチャージチェンバーの研究と開発
	大阪市立大学 宮本 重徳 理学部	
	京都大学理学部 松原 武生	量子統計力学の方法
1962	名古屋大学 高山 一男 プラズマ研究所	低密度プラズマの研究——特に共鳴探針法の発 明
	工業技術院 佐々木 亘 電気試験所	ゲルマニウムの熱い電子の異方性の研究
1963	京都大学理学部 林 忠四郎	天体核現象の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1964	東京大学理学部 岩田 義一	静電磁場における電子、およびイオンの運動に関する研究
	東京教育大学 光学研究所 瀬谷 正男	真空分光計に関する研究
1965	京都大学教養部 三谷 健次	弱電離プラズマのサイクロトロン周波数における負吸収の研究
	名古屋大学 プラズマ研究所 田中 茂利	
1966	大阪市立大学 理学部 三宅 三郎	宇宙線ミュー中間子およびニュートリノの研究
	東京大学 宇宙航空研究所 小田 稔	SCO-X-1 の位置決定
	東京大学 物性研究所 豊沢 豊	固体光物性の動力学的理論
1967	広島大学理学部 小川 修三	基本粒子の対称性に関する研究
	東京大学 原子核研究所 山口 嘉夫	
	東京大学 宇宙航空研究所 西村 純	超高エネルギー相互作用における横向き運動量の研究
1968	九州大学理学部 森 肇	非平衡状態の統計力学
	工業技術院 電気試験所 近藤 淳	希薄合金の抵抗極小の解明
1969	大阪大学教養部 松田 久	原子質量精密測定用大分散質量分析装置の開発
	名古屋大学 プラズマ研究所 池地 弘行	イオン波エコーの研究
	京都大学理学部 西川 恭治	炭素-14 による年代測定に関する研究
	学習院大学 理学部 木越 邦彦	
1970	東京大学理学部 西川 哲治	線型加速器に関する基礎研究
	東京大学 原子核研究所 菅原 寛孝	基本粒子の対称性の応用
1971	ミュンヘン工科大学 森永 晴彦	インピーダンススペクトロスコピーの創出と原子核構造の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1972	テンプル大学 物理学科	川崎 恭治 臨界現象の動力学的理論
	東北大学理学部	真木 和美 超伝導体の理論的研究
1973	京都大学 数理解析研究所	中西 襄 場の量子論における散乱振幅の諸性質の分析
	京都大学基礎物 理学研究所	佐藤 文隆 重力場方程式の新しい厳密解の発見とその宇宙物理学への応用
	広島大学理論物 理学研究所	富松 彰
1974	大阪大学教養部	大塚 颯三 半導体電子輸送現象のサイクロトロン共鳴による研究
	ニューヨーク市 立大学	崎田 文二 素粒子の超多重項理論および二重性理論の研究
1975	東京大学理学部	山崎 敏光 核磁気能率における中間子効果の発見
	東京大学 物性研究所	花村 榮一 多励起子系の理論的研究
1976	九州大学理学部	磯矢 彰 静電高圧加速器の研究とその新機軸の開発
	ロチェスター大 学理学部	大久保 進 強い相互作用による素粒子反応に対する選択規則の発見
	名古屋大学 理学部	飯塚重五郎
1977	東京大学 物性研究所	塩谷 繁雄 ピコ秒分光法による半導体の高密度励起効果の研究
	京都大学基礎物 理学研究所	牧 二郎 素粒子の四元模型
	筑波大学 物理学系	原 康夫
1978	分子科学研究所	廣田 榮治 高分解能高感度分光法によるフリーラディカル の研究
	東京大学理学部 東京大学 原子核研究所	有馬 朗人 丸森 寿夫 原子核の集団運動現象の解明

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1979	東京大学 物性研究所 守谷 亨	遍歴電子強磁性の理論
	高エネルギー物 理学研究所 小林 誠	基本粒子の模型に関する研究
	東京大学 原子核研究所 益川 敏英	
1980	大阪大学理学部 伊達 宗行	超強磁場の発生
	東北大学原子核 理学研究施設 鳥塚 賀治	原子核の巨大共鳴の研究
	京都大学理学部 プリンストン高 級研究所 九後汰一郎 小嶋 泉	非可換ゲージ場の共変的量子化の理論
1981	東京大学 教養学部 杉本大一郎	近接連星系の星の進化
	高エネルギー物 理学研究所 吉村 太彦	宇宙のバリオン数の起源
1982	筑波大学 物理工学系 安藤 恒也	MOS 反転層における二次元電子系の理論的研究
	(株)日立製作所 中央研究所 外村 彰	電子線ホログラフィー法の開発とその応用
1983	フェルミ国立加 速器研究所 山内 泰二	アップシロン粒子の発見に対する貢献
	東京大学理学部 増田 彰正	希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用
1984	東京大学理学部 コーネル大学 江口 徹 川合 光	格子ゲージ理論
	東北大学理学部 石川 義和	中性子散乱による金属強磁性の研究
	学習院大学 理学部 川路 紳治	二次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究
1985	マサチューセッ ツ工科大学 田中 豊一	ゲルの相転移現象の研究
	新技術開発事業 団 飯島 澄男	少数原子集団の動的観察
	宇宙科学研究所 田中 靖郎	てんま衛星による中性子星の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1986	東京大学理学部 鈴木 増雄	相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学
	広島大学理論物理学研究所 藤川 和男	場の量子論における異常項の研究
	広島大学核融合理論研究センター 佐藤 哲也	散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミックス
1987	東京工業大学 高柳 邦夫	シリコンの表面構造の研究
	東京大学 森本 雅樹	ミリ波天文学の開拓
	東京天文台 〃 海部 宣男	
	東海大学理学部 小柴 昌俊	超新星爆発に伴うニュートリノの検出
	東京大学理学部 戸塚 洋二	
	素粒子物理国際センター	
	東京大学 須田 英博	
1988	宇宙線研究所	
	名古屋大学 松本 敏雄	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測
	理学部	
	大阪大学理学部 吉川 圭二	ひもの場の理論
1989	東京大学 齋藤 軍治	有機超伝導体の新しい分子設計と合成
	物性研究所	
	理化学研究所 谷畑 勇夫	不安定原子核ビームによる原子核の研究
1990	東京大学理学部 野本 憲一	超新星の理論的研究
	東京大学理学部 佐藤 勝彦	素粒子論的宇宙論
	東京大学理学部 十倉 好紀	電子型銅酸化物超伝導体の発見
	高エネルギー物理学研究所 横谷 馨	リニアコライダーにおけるビーム相互作用の研究
1991	高エネルギー物理学研究所 北村 英男	挿入型放射光源の開発研究
	分子科学研究所 齋藤 修二	星間分子の分光学的研究
	東京大学理学部 和達 三樹	ソリトン物理学とその応用

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1992	NTT 基礎研究所 山本 喜久	光子数スクイーズ状態の形成および自然放射の制御
	筑波大学 物質工学系 大貫 惇睦	遍歴する重い電子系のフェルミ面に関する研究
	新潟大学教養部 長谷川 彰	
	東北大学理学部 柳田 勉	ニュートリノ質量におけるシーソー機構
1993	核融合科学研究所 伊藤 公孝	高温プラズマにおける異常輸送と L-H 遷移の理論
	九州大学 伊藤 早苗	
	応用力学研究所	
1994	理化学研究所 勝又 紘一	新しい型の磁気相転移の研究
	学習院大学 理学部 川畑 有郷	アンダーソン局在およびメソスコピック系における量子輸送現象の理論
	東京大学 原子核研究所 田辺 徹美	クーラーリングを用いた電子・分子イオン衝突の精密研究
	筑波大学 物理学系 岩崎 洋一	格子量子色力学の大規模数値シミュレーションによる研究
	筑波大学 物理学系 宇川 彰	
	高エネルギー物理工学研究所 大川 正典	
	京都大学基礎物理工学研究所 福来 正孝	
1995	東北大学大学院 理学研究科 佐藤 武郎	超低温における量子的相分離現象の実験的研究
	大阪大学大学院 工学研究科 川上 則雄	共形場理論に基づく 1 次元電子系の研究
	筑波大学 物理学系 梁 成吉	

年 度	受 賞 者		受 賞 者 業 績
1996	日亜化学工業(株) 開発部	中村 修二	短波長半導体レーザーの研究
	東北大学工学部	板谷 謹悟	固液界面でのアトムプロセスの解明に関する研究
	国立天文台 電波天文系	中井 直正	銀河中心巨大ブラックホールの発見
	国立天文台 電波天文系	井上 允	
	国立天文台 地球回転研究系	三好 真	
1997	東京大学 宇宙線研究所	木舟 正	超高エネルギーガンマー線天体の研究
	東京工業大学 理学系研究科	谷森 達	
	名古屋大学理学 部	三田 一郎	B 中間子系での CP 対称性の破れの理論
	東京大学物性研 究所	安岡 弘志	高温超伝導体におけるスピギャップの発見
1998	青山学院大学 理工学部	秋光 純	梯子型物質における超伝導の発見
	電気通信大学レ ーザー極限技術 研究センター	清水富士夫	原子波ホログラフィーの開拓
	筑波大学物理学 系	近藤 都登	トップクォーク発見に対する貢献
1999	九州大学理学部	井上 研三	超対称標準理論における電弱対称性の量子的破 れ
	近畿大学九州工 学部	角藤 亮	
	東京大学宇宙線 研究所	梶田 隆章	大気ニュートリノ異常の発見
	日本電気(株)基礎 研究所	中村 泰信	超伝導素子を用いたコヒーレント 2 準位系の観 測と制御

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績	
2000	東京大学大学院 理学系研究科	折戸 周治	宇宙線反陽子の観測
	高エネルギー加 速器研究機構低 温工学センター	山本 明	
	イタリア Pisa 大学	小西 憲一	小西アノマリーの発見
	京都大学大学院 理学研究科	堀内 昶	フェルミ粒子分子動力学による原子核の研究
2001	東京大学宇宙線 研究所	鈴木洋一郎	太陽ニュートリノの精密観測によるニュートリ ノ振動の発見
	東京大学宇宙線 研究所	中畑 雅行	
	高エネルギー加速 器研究機構	高崎 史彦	B 中間子における CP 対称性の破れの発見
	高エネルギー加速 器研究機構	生出 勝宣	
	大阪大学基礎工 学部	天谷 喜一	超高圧下における酸素及び鉄の超伝導の発見
	大阪大学基礎工 学部	清水 克哉	
2002	京都大学大学院 理学研究科	小山 勝二	超新星残骸での宇宙線加速
	東京大学大学院 理学系研究科	樽茶 清悟	人工原子・分子の実現
	大阪大学核物理 研究センター	永井 泰樹	原子核による速中性子捕獲現象の研究
	東京工業大学原 子炉工学研究所	井頭 政之	
2003	大阪大学大学院 基礎工学研究科	北岡 良雄	核磁気共鳴法による新しい超伝導状態の解明

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
2003	東北大学大学院 理学研究科	鈴木 厚人 原子炉反電子ニュートリノの消滅の観測
	大阪大学核物理 研究センター	中野 貴志 レーザー電子ガンマ線による新粒子の発見
2004	理化学研究所・ 日本電気株式会社	蔡 兆申 ジョセフソン接合素子を用いた2個の量子ビット間の量子もつれ状態の実現
	名古屋大学大学院 理学研究科	丹羽 公雄 原子核乾板全自動走査機によるタウニュートリノの発見
2005	東京大学大学院 工学系研究科	永長 直人 異常ホール効果の理論的研究
	京都大学大学院 理学研究科	西川公一郎 加速器ビームによる長基線ニュートリノ振動の観測
2006	理化学研究所	森田 浩介 新超重113番元素の合成
	日本原子力研究 開発機構関西光 科学研究所	田島 俊樹 レーザーを用いたプラズマ電子加速の先駆的研究
	東京工業大学大学院 理工学研究科	西森 秀稔 ランダムスピン系における「西森線」の発見
2007	物質・材料研究機 構ナノ物質ラボ	三島 修 水・非晶質水の相転移・ポリアモルフィズムの実験的研究
	大阪大学大学院 理学研究科	細谷 裕 細谷機構の発見
2008	国立天文台	家 正則 すばる望遠鏡による初期宇宙の探査
	東京大学大学院 理学系研究科	上田 正仁 引力相互作用する原子気体のボース・アインシュタイン凝縮の理論的研究
	東京大学大学院 理学系研究科	早野 龍五 反陽子ヘリウム原子の研究
2009	カリフォルニア工科大学 東京大学数物連携宇宙 研究機構	大栗 博司 トポロジカルな弦理論の研究
	東北大学大学院 理学研究科	田村 裕和 ハイパー核ガンマ線スペクトロスコピーの研究

(受賞者の所属は受賞時のもの)

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
2010	東京大学大学院 総合文化研究科	金子邦彦 大自由度カオスの理論
	京都大学大学院理 学研究科物理学	前野悦輝 スピン三重項超伝導体ルテニウム酸化物の発見

(受賞者の所属は受賞時のもの)

賛助会員一覧 (1992～2010年度の法人会員, 五十音順)

株式会社アルバック

科研製薬株式会社

鹿島建設株式会社技術研究所

関西電力株式会社

キッコーマン株式会社

キヤノン株式会社

国際電信電話株式会社

新日本製鐵株式会社

住友化学株式会社

住友電気工業株式会社

セイコーインスツルメンツ株式会社

中部電力株式会社

東京電力株式会社

日本電気株式会社

社団法人林原共済会

株式会社富士銀行

財団法人本田財団

三菱マテリアル株式会社

LECTURE NOTES IN PHYSICS VOL.746

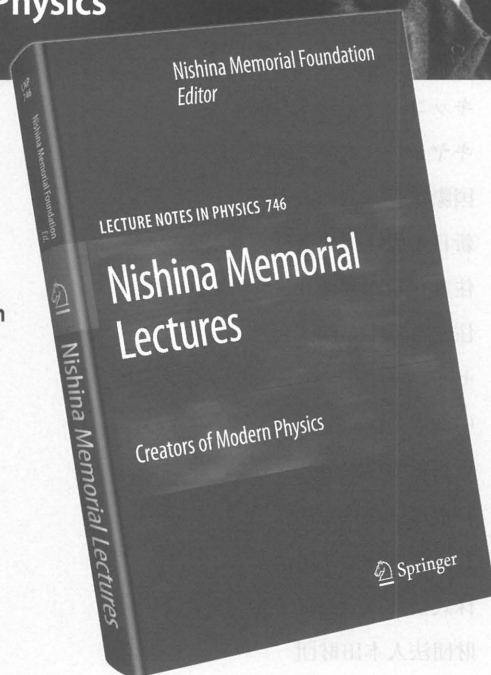
Nishina Memorial Lectures

Creators of Modern Physics



仁科記念講演会で行われた
英語による講演のうち、
ハイゼンベルクの原稿を
はじめとする18篇が、
このたび Springer Lecture Notes in
Physics シリーズの第746巻として
世界的に出版されました。

▶ 上製 402頁 本体9,000円
ISBN978-4-431-77055-8



Nishina Memorial Lectures 収録の講演者 (収録順)

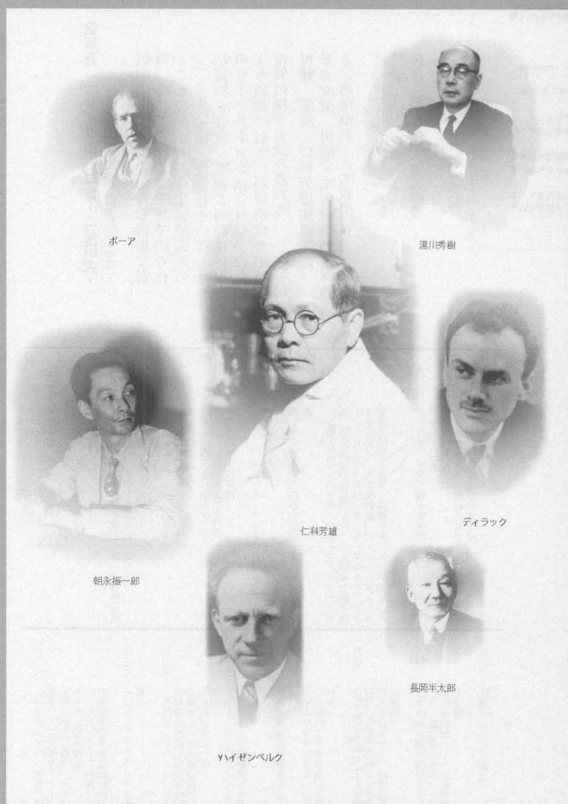
- | | | |
|--------------------------|----------------------|---------------------------|
| • Werner Karl Heisenberg | • Ben R. Mottelson | • Pierre-Gilles de Gennes |
| • 久保亮五 | • Kai Siegbahn | • Harold Kroto |
| • Julian Schwinger | • Philip W. Anderson | • Jerome I. Friedman |
| • Chien-Shiung Wu | • Leon Van Hove | • Martinus J.G. Veltman |
| • Freeman J. Dyson | • James W. Cronin | • Chen Ning Yang |
| • Richard P. Feynman | • Heinrich Rohrer | |

お問合せは シュプリンガー・ジャパン株式会社

▶ 所在地: 〒102-0073 東京都千代田区九段北1-11-11 第2フナトビル ▶ 電話: 03-6831-7005 ▶ ファックス: 03-6831-7006

▶ 電子メール: orders@springer.jp ▶ ホームページ: www.springer.jp

仁科芳雄の業績に新たな光を当て、日本における現代物理学の基盤がいかに築かれたかをつぶさに伝える。仁科に連なり国内外で戦前～戦後に活躍した幾多の物理学者たちの足跡が、書簡という一次資料を通して浮かび上がる。科学と歴史研究の未来へ向け刊行する、昭和の物理学者たちの遺産。【2006年12月刊】



仁科芳雄往復書簡集

全3巻

現代物理学の開拓

中根良平・仁科雄一郎・仁科浩二郎・矢崎裕二・江沢洋編
協力 財団法人 仁科記念財団

みすず書房

公益財団法人 仁科記念財団

〒113-8941 東京都文京区本駒込 2 丁目28番45号

電 話 03-3942-1718

ファックス 03-5976-2473

郵便振替番号 00130-5-135934

ホームページ <http://www.nishina-mf.or.jp>

E-mail : zaidan08@nishina-mf.or.jp